研究

佐伯城絵図解説（七）

三の丸の一部坂下御門付近

会員　小野英治

本図は吉田家伝来所蔵の文久二年（一八六三）十一月から、翌三年二月にかけての、佐伯城三の丸御奥増改築完成後の図面である。

原図はたて五五センチ、よこ三四センチで、御奥の間取を詳細に記しているが、ここに掲げた図は、これの一部、つまり坂下御門付近（原図の左下部）を、原図寸法のまま忠実に模写したものである。

もちろん、本図作製（吉崎）の意味からいえば、ここに記されていない部分こそが重要視されるのではあるが、その部分については、既に史談八十八号に「天保五年三ノ丸御殿図」として掲げた中に一応含まれているから、今回はこれを省略したわけである。

さて、この図で最も注目すべきことは、坂下御門の書込みがあることである。

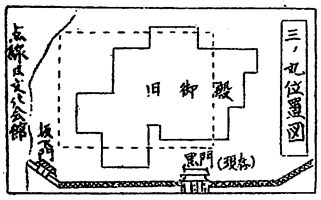
佐伯城の城門は、現存する古図から見て、只單に櫓門とか、冠木門とか図面に記すのが多く、このように坂下門と記す図は珍らしく思えるのであるが、往時は恐らく他の城門と区別するために、各城門にはそれぞれ固有の名称があったものと考えられるが、図中に位置まで明記したのは珍らしい例であるといえる。もっとも、これは図面の目的、性格にもよろう。例えば幕府へ提出する図（いわゆる修理伺図が主体となっている）には、固有の名称等必要とせず、ただその構造がわかる程度で事がたりたと考えられるから、櫓門と冠木門とに分類して記入したものであろう。

次に、坂下門の名称は、何によっているのであろうか。この門の位置するところは、三ノ丸櫓門の左手、石垣と山の接する所にあったもので、この門前は下り坂となっていて、位置からいくと坂上門とでもした方が適当と考えられる程である。

なお江戸城にも坂下門があるが、これは西丸の坂下にある門という意味であるが、江戸時代には西丸への裏手門として利用されたといい、西丸大奥へも近く、所謂通用門としての性格をもっていた門であったらしいが、その性格は佐伯城のそれと類似している。つまり奥向きの勝手口門としての性格が両者とも共通し、恐らく江戸城の名称を模倣したものと私は考えている。

次にその構造は、この平面図から見て引戸であったと思われる。巾二間強で、控柱をもった堂々たる門であったようで、左手に近接して番所が設けられているのはさすがである。恐らく番人が詰め、出入を厳しく監視していたものと思われる。位置からして出入商人、女中衆が多かったのではないだろうか。

また、門を入ってすぐ独立した建物で便所があり、井戸や大きな樽が設けられているのに注目されたい。井戸には井戸壁形が設けられていたと思われ、柱の位置が示され、又周囲の敷石等いかにもひんぱんに利用されていた往時が偲ばれるのであるが、今は文化会館の建物の下に埋れてしまった。



御蔵所
溝
道